

「防災の日」に寄せて

市長 米本弥一郎



「天災は忘れた頃にやってくる」

物理学者で随筆家の寺田寅彦の言葉といわれています。寺田は研究者として火災や地震などの災害に深い関心を持っていました。1923年の関東大震災発生時に上野にいた寺田は、自分のいる建物の安全を確認し「この珍しい強震の振動の経過を出来るだけくわしく観察しよう」と周辺を観察し、東京市内の焼け跡を回り、地震被害を調査しています。

寺田はその後、防災に関する多くの随筆を残しています。1934年には代表的な随筆ともいわれる『天災と国防』を発表し、ここでは大火・水害や台風による被害を取り上げています。そして「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向がある」と指摘しました。随筆から90年がたち、文明は進みましたが、寺田が指摘したとおり、私たち

の社会は災害に対し、もろく弱くなっているのではないでしょうか。また、昨今は忘れる間もないほどしきりに災害が発生しています。

市では災害に備え、総合防災訓練や津波避難訓練を実施しています。ここ3年は新型コロナの影響で中止していましたが、今月10日には新庁舎で初めての、職員による防災訓練を実施します。今後は感染対策をしながら避難所を運営する訓練や、市民の皆さまが参加して訓練が再開できるように検討してまいります。

市長就任後、何度も防災の研修を受けました。第一に学んだのは「危機管理は、市長が全責任を負う覚悟を持って陣頭指揮を執る」ことでした。災害協定を結んでいる組織や会社と連携・協力して市民の皆さまを守ってまいります。皆さまの備蓄や避難行動についてもお願いします。